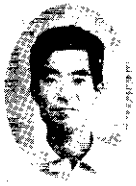
がんば

島三小育友会報
発行
広報部
印刷
つるかわ印刷所

第43号

一年間をかえりみて

育友会長　吉田重信



五里霧中でお引受けしてから早や一年、月日の経つのは早いもので、もうお別れの御挨拶の時がやって来ました。私にとりましては、実は長い長い一年でした。これまで育友会活動を進めてこられた、ベテラン会員の方々が卒業され、新しい会員や、新しい役員が入れ替って、本年度の事業を進めて下さいました。

各専門部の活動は、逐次、御報告があったと思いますが、役員、部員、会員の皆様の大変熱心な活動によって、大きな成果があがりました。町内や学級の育友会も、自主運営を目ざして、子供達の学習向上に、又、交通安全や、生活指導に、大きな役割を果してこられました。その活動の分野で仕事を分担された、役員、部員、会員の方々は、本当にご苦労さまでした。

本年は特に、体育館建設と、創立百周年と云う、大きい題目があり、体育館建設には、山本前育友会長を建設委員会の会長として、地元の市議会議員の方々、又、町内会、婦人会、青年団等、民主団体の方々の協力を得まして、五十年度完成が実現し、来年の今頃には、校舎の東側、児童公園の南側に、その姿を現わしていることでしょう。

大きさにつきましては、小学校の体育館ではあるけれども、充分社会体育に使用出来る広さをと、再三陳情を繰返しておりますので、市当局も考慮して下さることと思います。

又、百周年記念事業は、体育館建設に主力を注いだため百周年記念事業促進委員会の発会のはこびと、会長に、林田俊雄先生を選出してお願いしたにとどまっておりますが早急にその活動方法等を進めていかなければなりません。

又、新しい方向でスタートした運動会も、先生方と、会員の皆様の協力によりまして問題なく行なわれましたが、今後とも良識をもって、子供達の健全な育成の場として、発展して行くことを期待しております。

この一年、迷会長として、その席にありましたが、何もなすことなく、会員の皆様方や先生方、役員の方々には本当にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

家庭教育に思う

学校長　林田長

「寝ていても、うちわの動く親心」

「はえば立て、立てば歩めの親心」これは子どもの限りない成長を祈る親の心情をうたったものであるが、よくよく味わって見たいものである。

親が子に対する限りない愛情や、その子の成長にかける悲願は、東西古今そして今後永久に変らないことであろう。そして大自然の恵みの中に生きるよろこびを子孫に伝え、よりよき発展を願う親心は、まことに尊いものである。

私はいつも可愛い子どもたちを思うとき、そして子どもたちに接するとき、こうした親の姿を想起し、そしてこの子たちがこうした親の大きな期待と限りなく伸びていく可能性をもっている一人一人であり、この世界に今一つとない尊い存在であり、大きな奇跡であるとつくづく思うのである。ほんとうに大事な、大事な一人一人の子どもである。

このように考えるとき私たちは、もっと大自然の姿に心の眼を向け、思考し、この大自然の恵みに感謝し、この大自然を師とする考え方にまで自分を持っていきたいものである。そして自然を友とし、愛し、大事にする姿こそ教育の根源であると思う。

私たちはこの自然の中に家庭という愛情につつまれた小集団をつくり、この家庭集団の中で成長していくものである。そしてこの家庭こそ最も自然な愛情につつまれた最高最善の教育の場であると信ずるものである。

家庭は人間がこの世に生れ育ちそして他界していく人生の根拠でもある。昔から「鉄はあついうちにきたえ」、又「三つ子の魂百まで」ということばがある。これはきわめて幼い頃の教育がいかに人生について大事であるかを雄弁

に物語った金言であると思う。そして家庭教育の基本でもある。

明治六年より学制がしかれて全国に小学校、中学校、大学校が出来てここに百年間、学校教育は「日本人づくり」に偉大な足跡を残して来た。そして、今日の文明先進国日本をつくりあげたのである。しかし、静かに思いをめぐらすとき、あまりにも子どもの教育が学校教育「オンリー」になっていなかったか、特に戦後はいろいろの悪条件も加わってますます学校教育中心のうらみが大きくなったのではないか。

私たちは、この際じっくり学校教育はいうまでもなく、家庭教育の重要性を考え、そして今後これをどうしていくべきかを検討しなければいけないと思う。

そこで家庭教育について、私が日頃考えていること二、三を述べて見たい。

その一つは「物を大事にする親」の姿勢についてである。最近、大人も含めてあまりにも物が多すぎて物の中に埋まった生活といってもよいほどで、金さえあればいつでも何でも手に入る。したがって物に対するありがたさ、感謝する心がうすれている。これが物をそまつにし、物を大事にしないことにつながる。ついには人まで大事にしない心にすすんでいく。

きわめて憂慮される状態である。親は口で説教するのでなく、自分のあらゆる行動の中でおこないを以て教育していく「親のうしろ姿」にもっと努力したいものである。

次に、自分で出来ることは自分でする子どもに育てる努力をすることである。自分で出来ることは必ずすることが他を助け、生かすことになる。それは他を大事にすることにつながり、他との協調融和の基であることを考えて小さい子どもの時から、こうした習慣づくりに努力し、成功感や他の喜びを見て自分の喜びに感ずるような子どもに育てたいものである。

次に、子供には、ぜひ与えねばならないこと、させねばならないこと、決して与えてはいけないこととがあると思う。

そのためには、きびしさとやさしさとの「バランス」を常に考えて、子どもと接する必要がある。過保護はやさしさが強すぎて弱い子をつくってしまうであろうし、きびしさが過ぎると、これ又、卑屈で反抗だけしかしらない主体性のない子になってしまう。子どもには、したいこと、すき、きらいが常にくり返されている。好きだからさせてよいことばかりでなく、きらいだからさせていけないことばかりでは、いけない。したくないからさせない、したいからさせる、これを放任するところに大きな問題がある。

「私の家のこども像」をしっかりきめて、それが実現のためには確固たる信念（大愛）をもってあたるべきである。どんなにきらいでも、どんなにしたくなくてもさせねばならないことは断固としてこれをさせる。していけないことは、どんなに好きでも絶対にさせない、禁示するという勇気と大愛をもちたいものである。

それが、やがて子どもが困難にぶつかってこれにひるまず、よく考え、よく工夫し、これを解決する力、最後までじっとがまんしてやり通す心、根性に育っていく。親のこうした努力、姿勢こそ家庭教育の最も大事な事ではないかと思う。

そのためには、どうしても自分でしなければならない状態に、場面に子どもを追い込むことが必要である。そして親は細心の注意をはらいながら放任する姿も又必要であって、常にそばにいて「あれこれ」と世話が多すぎては、自主性も、主体性も、創造性も根気も育たない。

私は出来れば一日に一度週に一度は家族中がひたいに汗して子どもと一しょに仕事をするか、話し合いの場をつくるか、その他いろいろあろうが、そうした「人と人」、「人と物」との心のふれあいの場をつくることが非常に大事なことと思う。

こうした家庭ぐるみの行為の中から融和、協力の心が育ち感謝し合う心が育ち、自分の立場、他の立場をはっきり確認し努力する心が大きく育っていくのではないかと思う。

愚見が少しでも参考になれば幸甚である。

生活部

親のこころ

この四月から私は三人の父親から、一挙に六〇人の父親になると申しますと、びっくりされることだろう。

実は、この三月で住みなれた島原を去り、埼玉県の加須市へ引越すことになった。そして、全く新しい仕事、キリスト教の養護施設で、離婚や父親又は母親の家出などによって保護者がいなくなった子供達のお世話をすることになった。この施設は、島原でいえば、安中にある太陽寮のようなところだ。

一ヶ月程前、是非、働いてもらえないだろうかと要請を受け、引き受けたばかり。政府は社会福祉の充実を目標としてかかげ、長崎県でも昭和五四年度までには心身障害児の全員就学が決っていることは、大変うれしいことだ。ところが、社会福祉でも、日の目を見ないところがある。その一つが養護施設である。親

はおっても行方不明や長期疾病、離婚等で親と一緒に住めず施設に入っている子供が全国で三万一千人以上もいる。

この子供達には、六人に一人程度の保母さんがついて、家庭とも寮ともつかない所で生活をしているのだ。この子供達は、施設に入れられる前から親との離別とか他の様々な問題に巻き込まれ大きなショックを受けて施設に入って来る。しかも十八才になると、公立高校に入れぬ子供は、施設から出て行かなければならない。知能は普通であっても、精神的なショックや両親からの愛情を充分受けていないために能力がありながら、その力を伸ばすことが出来ず、無気力で、学校の成績もかんばしくなく、非行に走りやすいと言われる。

私は、このような子供達が何とか一人前に成長し社会へ出て行くことができるよう与えられた仕事に専念する覚悟でいる。

この施設の子供の事を考える時、私は、三小に子供さんを送っておられる保護者の方に、いくつかのことを申し上げたい。

第一、両親はいつも仲良くしていただきたい。意見の喰いちがいで、時々、私共夫婦は議論を戦わすことがあるがほんのささいな事であっても、そばにいる子供達は、息をのんで私共を見守っている。親は、レクリェーションのつもりであっても、子供の精神、情緒面に受ける打撃は大きい。

第二は、無理をして、共嫁ぎをしないこと。子供は、いくつになっても母親を慕う。学校から帰って母親が家にいないと、子供はどんなに悲しく、むなしい思いをすることだろう。多額の小遣や、おやつでは、子供のさびしい心をいやすことはできない。学校での緊張を、ほぐしてやる責任が親にあるのだ。母親が、側にいるだけで良いのだ。

第三、親子の交流を持つこと。この点については、前号の「がんば」でも、読書とテレビの問題で書いた。テレビをつけっぱなしにしている家庭は、一見、にぎやかで、和やかそうに見える。しかし、そこには、心の交い合う場所が無いのだ。もっと親子間の心の交流が必要だ。我が家では、このところ、ダイヤモンドゲームが大はやりだ。「コマの進む道をわざと、お父さんは止めた。」とか、「お母さんは、こすか。」「ようし、今度は勝つぞ。」とか、互いに交わす会話の中で、心の深いふれ合いを経験している。

もし、以上にあげたような点が、家庭に欠けているとするならば、子供にいくら才能があっても、充分それを伸ばすことができなくなるだろう。これは、親が、その責任を果さなかったことになる。私共親として、充分気をつけてゆかねばならないことではないだろうか。

最後に、教養部の反省と、新年度の課題を少し書いて、責任を果させていただきたい。この一年、教養部では、これまでとほとんど変わらない行事をしてきた。巡回図書、研修旅行、読書運動の啓蒙等であった。巡回図書は、前年度よりは少し多く読まれたのではないかと思うが、まだまだ、父兄の方から班長宅へ借りに来る人が少ないようだ。研修旅行は、七月の「がんば」に報告、反省が出ていたので、ここでは省かせていただく。読書運動の啓蒙はアッピールする時が少なく、効果をあげることができなかったように思う。新年度には、学級部会と協力して、父兄がもっと自主的に読書をする機会を持つようにしたら良いように思う。

私共、親は、子供に読め読めと言う前に、お互いに本を読みあう必要があるのではないだろうか。

もう一つの願いは、学校内に、PTAのたまり場を作っていただきたい。その部屋へ行けば本も見られ、簡単な印刷もでき、お茶を飲みながら雑談できるというような所だ。この部屋で親も先生方も、お互いに教育、政治をはじめ様々な問題について心を開いて語り合えるならば、更に楽しいPTA作りができるかもしれない。

教養部長
久保　亨

各部の反省と新年度の課題

生活部

生活部の反省と新年度の課題

四月新しい部員で色々な計画をもって出発しましたが、思う様に実行出来なくて申しわけなく思います。

①少年団の自主的運営の推進
②約束を守ろう
③夏休レクレーションの再検討
④町内の環境調査と検討

①について各部員がそれぞれの町内での少年団行事について子供達に出来る事はやらせて見るといがいに立派に出来たようです。

②については子供に約束を守らせるためには青友会員が先ず約束を守ることですが全会員への呼びかけが不足でした

③について部で資料を集めて発表しましたが今年は単なる旅行でなく色々計画され社会科見学の意味をもたせかつ親子共に喜び合える行事、たとえば全員参加のキャンプ等今までにない新しい行事があり

ました。
④について特にありませんでしたが交通部と共通する課題でもあり特に対策を立てませんでした。
其の他三校連絡協議会で協議議題で校外生活特に非行の件については三小ではあまり問題はありません。
このような経過でありました生活部の反省としては全般的に努力がたりませず思うような結果が出来ませんでしたがやりたかった事を二三申し上げたいと思います。
生活部の活動は他の専門部との関連が深い事です。
○集団登校では交通部
○夏休生活指導では体育部
○隣接町内育友会との連絡
以上は新年度ぜひ計画していただき度いと思います。
子供の校外での生活が親の一番気をかけねばならないところです先ず自分の子供に気を配る目を配ることを忘れないで下さい。
朝登校するとき頭かお尻をなでて出して下さい肌と肌とのふれ合いから子供の一日を始めさして下さい。
○出来れば子供のホッペに行ってらっしゃいのキッスをしてやって下さい。
○非行には走りません親子の断絶はありません。
楽しい事ですやさしい事です。
つまづきながら部員の皆様の助けをかりてやっとの思いで一年間をすごしました。
ありがとうございました。これでやっと親子共々卒業する事が出来ます。

生活部長　松隈保吉

体育部

体育部の一年間

体育部の活動を一年間ふり返ってみると、部活動は夏休み期間、児童の非行防止と、体育の向上に重点をおき、又各町内育友会の親睦のため非常に役に立って来たと思います。まず夏休み最初の行事として、七月二十八日、少年団対抗球技大会を、男子は霊丘公園でソフトボール、女子は三小校庭でフットベスボールを行いました。次に八月二十五日、少年団対抗水泳大会を三小プールでいたしました。これは各種目別に技を競い、白熱した大会となりました。
又九月二十二日二小体育館と、二中体育館に於いて恒例の（第三回）町内対抗バレーボール大会を開催致しました。各町内育友会より選抜された父兄選手の日頃の練習の成果が一気に展開され、満場の応援団の声援のもとに熱の入った大会となりました。十一月二十四日には、第二回親子ハイキングを実施し市営サッカー場まで行き、全員でサッカー、バレーボール、ソフトボール、等を一日楽しみました。
以上のような催しをして、学校と児童、家庭、とが、ち密な連絡をとり、又各町内育友会相互の親睦のためには役に立ったことと思われます。新年度の研究課題としては、一部父兄の要望にありました町内対抗卓球大会等、その他何らかの希望があれば今後研究して行きたいと思います。
反省すべき点としては、夏休み期間の体育行事に児童が、対抗意識を燃やし過ぎ、練習に熱中するあまり、学習面がおろそかになる傾向が見受けられたことです。この問題点を研究する必要が学校当局と育友会にあると思われます。
最後に各行事の練習、試合、準備等、運営に協力を戴いた学校当局及び会長を始め、父兄各位に紙上をもって厚く御礼申し上げます。

保健体育部長　坂本政幸

交通部

交通部の活動について

この一年間、〝子どもの交通事故皆無〟を大きく目標にかかげ、安全運動の展開と実跡を続けてまいりましたが、いま静かに振りかえってみますと、まず、昨年五月に二中といっしょに、「子どもたちの通学順路における危険か所の善処について」関係町内の役員の方々と、話し合いを持ち、六月二十二日に、市長、教育長さんに、危険か所の改善について、陳情いたしました。その結果、光永タバコ店の所に、「子どもに注意」の表示と、堀副茶屋店の所には、カーブミラーの設置をみました。
十一月には、お母さん方の「自転車教室」をひらき、たくさんの、おかあさん方が出席され、婦人交通指導員の方から、講話と自転車の乗り方の実施指導を受けられ、大変有意義だったようです。参加者の声として、もっと早く、五月ごろ開催できたらという積極的な意見もありました。
十二月には、坂下町内会五島重利町内会長さんより、市営と畜場跡地の、利用に関する陳情として、「交通公園」の設置について、市長さんへ陳情をしていただいております。交通部としては、本当に有難く感謝している次第です。この「交通公園」の一日も早く、実現することを、希望いたします。会員みなさま方にも、その趣旨を十分お汲みくださって、最大のご協力をお願いいたします。
とりとめもなく、二、三のことをかきましたが、まだ子

どもたちの通学については、安心できる状態には、ほど遠いようです。暖かくなれば、「マムシ」をおそれ、たそがれには、痴漢がではしないかと、心配される通学路もあります。一年間、補導に協力くださいました、部員や会員の方、ならびに関係各位に、心から厚くお礼を申し上げますとともに、子どもたちが大過なく通学できましたことを皆さんとともによろこびたいと思います。

なお、伊藤吾先生・大隈謙一郎先生には、年間をとおして、大変ご指導ご協力をいただきましたことを、みなさんと感謝し、お礼申し上げます。

交通部長　伊藤八郎

広報部

今年度の編集を終って

昨年度、「がんば」が誕生して、丁度十年目を迎え、先輩諸氏の思い出や、苦労話を多数お寄せ戴きましたが、十年を一区切として、本年度は新な気持で、新しい「がんば」にしようと云う意気込みを持って新年度をスタート致しました。新しい企画のもとに親しめる、見やすい「がんば」にするために、写真を豊富にとり入れ、行数を少なくして、読みやすくしようと云うことを目標にして努力を重ねて来ました。

昨年七月、本年度の第一号を発行するに当り、会員の皆様からの多数の原稿をいただき、又学校側からも数多くの原稿を戴きました。

新学期が始まり、PTAに於ては、新しい会長、副会長をはじめ各専門部も決まり、第一号のみでは収録出来ない程の原稿が集まりました。

我々広報部員にとっては、何よりもうれしいことです。

原稿の内容よりみて、どうしても第一号に掲載しなければならないものを選別し、次号以後に掲載しても差支えのない内容のものは、不本意ながら二号に収録させて戴きました。原稿を御寄せ下さった皆様には大変御迷惑をおかけ致しました事をお詫び申し上げます。

内容的にも新企画を取り入れるつもりのものが、ほとんど前年と同じ内容の記事になり、我々の努力が到らなかった事を痛感致しております。

第二号は十二月に発行致しましたが、この号には第一号に収録出来なかった皆様の原稿を全部掲載することが出来ました。しかしながら記事の内容よりみて、写真の掲載がむずかしく八頁全部活字でうまってしまい大変かたい感じになってしまいました。

本号をもって本年度の最終号となります。本号及び過去二回分の「がんば」をごらんになって如何でしたでしょうか。お気付の点がありましたらどしどし御意見なり御感想をお寄せ戴きよりよい「がんば」に育てていきたいと思っております。

尚本年度始めに会員の皆様に、アンケートをお願いして「がんば」がどの程度読まれているかを調査してみたいと思っておりましたが我々の努力が足りずに実行にうつすことが出来ませんでした。本紙を借りてお詫び申し上げます。

又本年四月からの新年度には、すばらしい記事と新しい広報部員の手で、立派な「がんば」がうまれることを期待しております。

広報部長　大野逖正

春休みを楽しくするために

春休みは、新しい学年へ進むための準備の期間です。旧学年の反省をもとに、新しい学年への心構えと計画の中で、むだのない、楽しい生活をすごしましょう。

一、生活について

1家族的なむだのない楽しい生活を送るために、みんなで休みの利用を話しあいましょう。

2すすんで家事を計画し、家族的行動につとめさせましょう。

3三小児童としての規律ある生活をさせましょう。

4遊びを通しての事故や非行の防止につとめましょう。

○外出についての約束を守らせる

○午後六時までには家に帰る

○交通のきまりを固く守らせる

○飲食店、映画館など友だち同志で行かせない

○金銭の使途、与え方、商店の出入など家族で話しあって約束を守らせましょう

二、その他

○学習は復習をしっかりいたしましょう

○新学年の学用品の点検をしておきましょう。

○疾病の治療は、早めにさせておきましょう

生活部

卒業生感想文

六年間の想い出

六年二組　時合伸明

ぼくの六年間の思い出は楽しかったいろいろな行事や、悲しいでき事などたくさんあるけれども一番印象強く残ることは五年六年と二年間日記を書き続けてきたことだった五年生になった最初先生から「がんばり帳に、その日の勉強がすんだら一日を反省して、心に強く残ることを日記として書いてみよう」。といわれた。それまでは、家ではただ復習をすることだけでせいいっぱいだったぼくは「いやだなあ」と思った。そして何日かは書けるかもしれないが毎日毎日つづけて書くなんて、なにを書くといいのだろう。そんなに書くことがあるのだろうかと心配でたまらなかった。いよいよ書きはじめることになった。がんばり帳をすませてから先生がおっしゃったように一日のできごとを朝から順に思いだしてみた。学校での生活や家でのできごとが次々と思い出され心に強く残る喜びや、又反省することなどたくさんあった。「なにを書いたらいいだろう」という心配はいらなかった。そのうえ書く楽しみが一つできた。それは先生がその日の返事を日記に書いてくださることだった。今日のぼくの日記の返事は、なんと書いてあるだろうかと楽しみになり、自分の考えや喜び、はらだちなどなんでも書いた。

書いてみるとたまらなくはらがたつことでも少しはたえられるようになって来た。

今卒業を前にしてふりかえってみて「よく二年間続いたなあ」と思う。又日記の大切さもよくわかった。そして先生が、ぼくたちに日記を書かせたわけも少しはわかってきた。

これから一歩前進して中学へと進んでいくができればこのまま日記を書き続けていつも自分の生活をふり返りふり返り一歩一歩着実な歩みをつづけていこうと思う。

想い出

六年三組　古賀仁子

私の小学校生活での思い出は、とても多い。一年生の時の初めての遠足や運動会、球技大会、父親参観日。その中でもいちばん頭に残っているのは父親参観日だ。

その時私は、とてもきんちょうしていて休み時間から席について、姿勢をきちんとしていた。はじめて、おとうさんに授業を見てもらうので、いまかいまかと授業の始まるのをまちかまえていたのだ。その時、先生が「古賀さん、そんなにかたくならなくてもいいのよ。まだ授業は、はじまっていないのだから。」と言われた。私はとてもはずかしかった。

ほかにもまだまだたくさんの思い出がある。五年生の秋に登った普賢岳、背たけぐらいもある草をかきわけかきわけ登ったあの坂道。とちゅうで、すべったりころんだりして、服はまっ黒になった。しかし、あの頂上のすばらしいながめで、つかれもふっとんでしまうようだった。

なんといっても忘れられないのは、六年の時の修学旅行と県の音楽会。

この旅行でいちばんよかった風景は、天草の五つの橋だった。島から島へかけられたこの橋は、形も色も工夫され青い海にとけ合っていた。

県の音楽会では「アイレスのイフゲニア序曲。」と「あかね雲。」を演奏した。私の楽器は、木きんだった。はじめはできるだろうかと心配だったが、練習を重ねていくうちに少しずつ自信がついてきた。文化会館での発表がおわった時、ほっとした。

百年の伝統をもつこの三小とも、もうすぐお別れだ。たくさんの思い出を胸にひめ、元気に卒業していきたい。

卒業生父兄を代表して

卒業するあなたへのねがい

広馬場　伊藤亜希子

卒業おめでとう!!

六年前の四月一日、あなたはお母さんに手をひかれて、さくらの花咲く三小の運動場を一周りしたのを憶えていますか？無邪気で、お母さんの肩迄もなかったあなた。それがどうでしょう、もうお母さんをはるかに追い越して大人になろうとしているのです。

先生、ほんとうに有難うございました。

そんなあなたに期待は大きいのです。「健康であって欲しい。」「りっぱな人になって欲しい。」と、沢山、沢山欲ばりたがる私達――。

でも果てしない希望の前にぜひぜひ、最低のお願いがあるのです。それは、「他人に

迷惑をかけない人」、「自分のことは自分で必ずやる人」この二つです。とてもやさしいことで「なあんだ」と思われるかも知れません。しかしこれを一生涯通して実行することは大変むづかしいことなのです。どうか、このやさしくて、むづかしい二つのねがいを心に深く刻んで実行して下さい。そして、この美しい自然に恵まれた島原第三小学校と、暖かく導びかれた先生方への感謝の気持ちを忘れないで健康に前進して下さい。広い広い未来の道へ。

※　※　※　※　※

想い出

中組　時合キヨカ

背中一杯のランドセルで引倒される様にして通い始めた息子。早くも卒業を目前に、中学生活への一抹の不安と喜びに胸おどらせているこの頃です。運動会の練習で発熱。梅雨時　外庭の掃除でハゼマケ、顔中お化けの様になったり、泳げなくて、水泳教室へ。初めての球技大会、この六年間の出来事が、昨日の事の様に鮮明に思い出されます。

良き先生、良き友を得て、脱線する事なく、順調に成長した息子、何よりも、うれしさで一杯でございます。

私、五年間、代議員の一人として、各種会合に時間のゆるす限り出席いたしてきました。何の発言力もない私ですが、勉強の機会を与えて下さったものと感謝いたしております。

三小育友会員として十余年、本当に長い間、お世話様になりました。

今後の育友会の御発展をお祈りいたします。

保健室だより

学校保健法や結核予防法の改正により、今年度から健康診断の項目や方法が改善されました。従来と変った点をおしらせいたします。（小学校関係のみ）

◎新しく加えられたこと

1 保健調査票の記入
お子さんの生育歴・体質・罹病傾向等について、ご家庭でくわしく書いていたゞき、学校医による健康診断時の参考資料にします。

（一・三・五学年時に記入）

2 尿の検査（蛋白・糖・潜血）
全学年実施
じん臓疾患等の早期発見のため。

3 心臓検診（レントゲン）
一年生のみ

4 肥満児の発見　全学年

◎簡素になった項目

1 ツベルクリン反応
一年生ー全　員
二年生ー前年度陰性だった者のみ
三年生以上はツ反しない

2 BCG接種
一年生の陰性者のみ

3 結核検診（レントゲン）
一年生全員
四年生要注意者のみ

4 聴力検査
一、四年生

5 色覚検査
（今までの色神検査のこと）
一、四年
判定は色盲色弱ではなく、強度・弱度になりました。

◎病名の変更
蓄　膿　症　→　副鼻腔炎
扁桃腺肥大　→　扁桃肥大

※検査料金について
検便・蟯虫検査の検査料金は毎年、各児童から徴集していましたが、今年度より（49年度）市で予算化していただき、検便・検尿・蟯虫検査共、個人負担金なしで検査がうけられるようになりました。

おめでとう

健康優良児長崎県一位
六年四組
松本慎二君

歯の衛生週間の作品（ポスターの部）
全国第二位
五年三組
小沢久美さん

健康優良児県一位の表彰を受けて

津町　松本絹子

去る一月二十四日、二十五日の両日、佐世保市で行なわれた学校保健、学校安全研究協議大会で、子どもが、健康優良児県一位の表彰を県教育委員会、朝日新聞社より受けました。

県一位になったことは、昨年九月にわかっていましたがこの日が表彰式だったのでした。長崎市での県審査では、まさか県一位になるとは思っておりませんでしたのに…。

たくさんの方々の前で、わが子が表彰される喜びは、目頭があつくなる程の感激でした。

幼い頃から、からだは大きい方でしたが、現在では一六三センチの身長になり、私より大きくなりました。

幼稚園の頃より、長男と一緒に津町少年団のソフトボールの練習について行き、ボールひろいを一生けん命にしていた姿が思い出されます。

何でもよく食べ、スポーツが好きな子どもです。間もなく小学校を卒業し、四月からは中学生になります。

県一位の表彰が、これからの中学生活の励ましとなってさらに大きく成長することを願っております。

家庭教育雑感

桃山町　児島善子

子供は、両親に似るのが、自然の理であり、世に言う、トビがタカを産むという事は親のかくれた才能が発揮された場合であって、無から有が生じるわけがないのか、我が家の子供達も親に似て、年相応の誠に平凡な子である。

しかし世の中には、この厳粛なる事実を忘れて、子供にあまりにも、期待しすぎてはいないのだろうかと、私を含めて思わざるを得ない場合によく出合う。それが「学習」という事に、大いに求められ、「家庭教育」と言えば、即「家庭学習」と感ちがいしてし

まうことがある。金剛石も磨かなければ光らないのは、事実だが、磨けば、何でもかでも、光りを放つからと言っても、他の石は又違った光を放つだろうし、その光の中にそれなりの良さが、きっとあるという事を今一度、考えながら愛情を持って、子供も磨きはぐくんでいきたいものです。親には、子供を立派な社会人として育てていく責任があり、学校教育のように詳細な計画は立てられないけれど、個々のそれぞれの家庭の事情によって異るのが、家庭教育なのだと思うにつけ、子供に不平不満ばかりを、言い「もっともっといい子であれ。」「もっと学習の成績が上ってくれ。」と願う前に、大いに自分の家庭の環境はどうか、自分自身は、どうであろうかと、不完全だらけの自分を思うにつけても、この機会を借りて大いに戒めてみる必要がありそうです。

子供を躾るのは、一番子供を知っている家族が第一だし、特別な場合を除いて、誰れかをあてにしてしまっては、いけないと思うのです。その家の子供の年令や性格（同じ環境、同じ食物で育てていてもこうも兄弟性格が異るのかと驚く事が多い）によって、それぞれに適切なる基本的躾が出来るのが、家庭教育ならばこそで、家校での集団生活における躾は、していただくとしても、子供の日常生活のこまかい悪いくせ迄学校に、全てお願いしますでは、役割の勘違いも、はなはだしいと、思います。「親の十言より先生の一言」が、ききめがある場合もありますけど、それ以前の試みもしないで、先生まかせじゃ、親としても淋しいかぎりです。毎年のように学級懇談会で問題になるテレビの視聴についても「家の子は、朝からテレビのマンガばかり見て困るのです。何とかならぬものでしょうか。」という意見を聞くにつけ、「マンガは、朝からみない様にしょうね。」とそこまでは先生も言えても、それ以上の事は出来ないはずです。どうしても、親が見せたくないと思うなら、思った時点で理由をはなし、理解させて、スイッチが切れないのか。「勉強しなさい。」と強く言える親より「スイッチを切れ。」と強く言える親が頼もしい気もします。ちょっとした一例にすぎないけどこんな事は、往々にして多い事だと思います。

そして学級懇談会においても毎年同じ事のくり返しの様に同じ議題で話し合うだけじゃなく、もっと時代に応じて年に応じて内容を豊かにし、例えば、此頃の子供の身体の成長と情緒面とのアンバランス（そこには、性教育も当然必要になってくるでしょう）非行の問題点等意欲的に知りたい、勉強したいと思っている人も少なくないと思います。

一番教育の満足に、出来ない時代に育った私達が、今、育友会の多くを占めているわけですが、核家族となり、昔と違い確たる家訓も、ほとんどもたぬ家庭となった今、家庭教育なるものを、今一度、考え直して、しっかりと、子供達を正しい方向に導いて、不作法な、自分本位の善悪の区別さえ見きわめる事の出来ない子供にしないためにも、目をそらさないで、ゆきたいものです。人間形成の場は、あくまでも家庭が主体である事を忘れないためにも。

初市と十円玉一ケ

桃山町　有馬隆子

島原の春を告げる恒例の初市が、今年もやって来た。朝九時、待ち兼ねた様に、開始合図の花火が上がる。「どうして毎日花火が上がるの？」。息子は不思議そうに尋ねる。

「そうね。あれはね『初市にいらっしゃい。いらっしゃい』と云うのと同じことなのよ」と云ってやる。「花火で知らせるとね。どうして？」とくる。「そうね、遠くの人にも聞こえて『ああ、初市だったな。じゃ行こうか』って思い出させる為じゃないかな」と答えてやる。やっと納得したらしく、おとなしく亦遊び出した。

昼食後、近所のお友達と遊びに出ていた息子が、三時過ぎ……息せき切って帰って来た。「お母さん」ガラガラ玄関の戸は、案の定開けっぱなし、クツだけは、まあ足からはなれていた。飛び上って来る。何の一大事かと思って返事する。「公園の初市の中ばね、○○君と歩きよったら十円落ちとったとさ。二人でひろってね、お巡りさんの廻りよらしたけん『ひろいました』ってやったらね、『うんおりこうね』って云うてね、ズボンのポケットに入れらしたとよ。そうしてもう一つのポケットから財布ば出して、○○君とぼくに十円ずつやってね『おりこうだったけん、お巡りさんが、ごほうびをやろうね。何か買いなさい』って云うてくれらしたとよ。ガム買うてよか？」だった。若いお巡りさんだったらしい。その話を聞いて、私はそのお巡りさんの顔が、何だか想像出来る様な気がした。只の十円玉一ケを拾って届けた子供達を褒めてくれ、ズボンのポケットに入れて、ちゃんともう一方のポケットから出した財布から、「ごほうび」までくださるとは……「ああ、十円ね、君達にあげるよ」と、もしその時云われていたら、子供達はどんな気持になっていたろう。常日頃、どこのご家庭でも、「拾ったものはちゃんと届けるのよ」と、おっしゃっているに違いない。此の若いお巡りさんの素晴らしいこの時の処理で、子供達は自分のやったことが、子供なりにも本当に正しいことをやったのだ。と、しっかり心に残ったことと思う。此れは、二年前の初市の或る日の想い出である。ふと花火の音を耳にしていると、昨日のことの様に想い出されて来る。

その息子も四月には、もう第三小学校の二年生になる。

編集後記

本年度の最終号をお届けします。各号に対して原稿をお寄せ下さった方々に心からお礼申し上げます。

どうもありがとうございました。